

### ■ 身体症状という仮面をかぶったうつ病

清田さんはうつ病だったのです。それも仮面うつ病と言われるものです。最近さまざまな身体症状を訴えて、内科や臨床各科を訪れる、比較的軽症のうつ病患者の存在が注目されています。しかし、うつ病患者特有の精神症状は目立たず、もっぱら身体症状が顕著であるために仮面うつ病と呼ばれています。身体症状という仮面をかぶったうつ病というわけです。

仮面うつ病は、心の病気から生じた身体症状ですから、一般的な診療や臨床検査では、体の器質異常が発見されません。清田さんがいろいろ検査してみたけれど、どこも悪いところはないと言われた、まさにその通りなのです。

そういうことのために、しばしば過労や気のせいにされたり、自律神経失調症や神経症と判断されることも少なくありません。身体症状に対応して行う一時的な治療のみでは、仮面うつ病には効果が現れにくいものです。

### ■ 典型的な仮面うつ病のもう一つのケース

次のケースは48歳の会社役員が陥った事例ですが、典型的な仮面うつ病の病状で、心療内科でのうつ病に対する治療によって見事に回復した例ですから以下に紹介してみましょう。

会社役員の安田さんは不眠が続く、頭痛もあり、全身倦怠感が激しく病院を訪れました。一人ではとても歩けないような状態で、奥さんと奥さんのお父さんに支えられての来院です。顔色は憔悴そのもので、目もまともに開けていられない様子。医師は診察し、うつ状態と判断してすぐ入院させ、抗うつ剤の点滴を始めました。

これが効を奏し、みるみるよくなって、10日目ごろには自分で歩けるし、笑顔さえ見せるようになりました。ここで初めて医師は、ことのいきさつを安田さんから聞きました。

安田さんの経営参加する会社のある事業部門はかなりの収益を上げていました。そこである仕事を、目頃お世話になっている子会社に譲ってあげたのですが、その仕事は失敗し、それが原因で子会社は倒産の憂き目にあってしまったのです。

以来、そのことを思うと、胸が痛むことしきりです。お礼のつもりでやったことが裏目に出てしまったのです。いくら後悔しても、後悔しきれるもの



ではありません。そのような日々が続くうちに、夜も眠れなくなり、食欲もなくなり、頭痛もして気も狂わんばかりの心的状況に陥ってしまったのです。

安田さんはいわゆる執着気質です。これは一つのことにとこだわり始めると、そのことから心が容易に離れなくなってしまう気質です。執着気質はうつ病に陥りやすい性格であることはよく知られています。

こうした性格の人がうつ病になった場合は、ものの考え方を考える方向にもっていかないと、一旦治ったうつ病も何かの折に再発してしまうということになりかねません。

心療内科の医師は安田さんに次の三つの点を繰り返し話し、納得してもらいました。

まず、よかれと思ってやったことで、初めから悪くしようとしたことではないこと。次に、今後のことが大事であって、済んでしまったことをいくら悔やんでも始まらないということ。そして三つ目に、事業をやっているならば、いつも追い風に乘ってうまくいくものと限ったものではないという認識を持つこと。

何度も繰り返されたカウンセリングの中で、医師はこれらの点を伝えたのです。安田さんは次第に前向きな考え方を持つようになり、同時に仮面うつ病も全治し、あれほどに日夜安田さんを悩ませた身体症状はウソのように消えたのです。